

帝政期ドイツの政治構造に関する理論モデルの再検討

帝国議会研究の成果と課題(1)

Nachdenken der methodische Modelle über politischen Struktur im deutsche Kaiserreich:

Erfolge und Probleme der Reichstagsforschung(1)

小 原 淳

Jun OBARA

(和歌山大学教育学部)

2014年9月30日受理

要約

ドイツ帝国議会は、ヨーロッパのなかでも早期に普通選挙制度を実現しており、住民各層の政治参加も積極的であった。この帝国議会についての研究には多くの蓄積がある。しかし、M・L・アンダーソンをはじめとする比較的近年の研究によって、この民主的な選挙制度が権威主義的で非民主的な帝国政治に及ぼした影響や、議会・選挙・政党の歴史的な変遷、さらにはナチズムに至るドイツ現代史との連関等の問題に再考が迫られている。本稿は二度にわたり、帝国議会選挙に関する諸研究を批判的に論じる。本号は、ミリュール論とラーガー論、そしてS・スーヴェール、J・R・ヴィンクラー、J・スパーバーの研究を主たる対象とする。

1. はじめに

権威主義体制の時代であるドイツ帝政期は、民主的な選挙制度が安定して実施され、広範な住民の積極的な政治参加が実現した「民主主義の練習期間 Lehrjahre der Demokratie」でもあった¹。ドイツでは既に1867年以来、全国レベル——北ドイツ連邦議会、そして帝国議会——において25歳以上の成人男子を対象とした普通選挙制が導入されているが、同等の選挙資格による選挙が実施されたのは、ギリシャが1844年、スイスが1848年(ただし個別のカントンのレベル)、フランスが1852年、スペインが1890年、ノルウェーが1906年、オーストリアとフィンランドが1907年、スウェーデンが1909年、イタリアが1912年、デンマークが1915年、アイスランドが1916年、オランダが1918年であり、政治体制の持続性と有権者の数的規模を考慮すれば、その先進性には特筆すべきものがある²。無論、この事実のみをもって、ただちに帝国の権威主義的性格を否定できるわけではない。帝国議会の権限には大きな制約があったし、帝国を構成する諸邦の次元では極めて不平等な選挙制度が長らく残存していた。しかし、1871年の第一回帝国議会選挙に50.7%であった投票率は、多少の増減を経て1887年に77.2%、1912年には84.5%へと上昇したし、1870年以降、バイエルンでは平均して二年ごと、プロイセンでは21か月ごと、そしてザクセンでは15か月ごとに一度、帝国レベルか邦レベルの選挙が行われていた³。帝国議会は、普通選挙制の導入者であるビスマルク(Otto von Bismarck 1815-98)の意に反してあらゆる階層の人びとの政治参加の中心、

ドイツの政治文化が形成される舞台に成長していったのであり、第一次世界大戦後の、過剰とも呼ばたくなるほどの政治熱は、早くも帝政期にその端初が開かれていたのである。

この、オーソドックスな領域であった帝国議会研究に新境地を開いたのが、M・L・アンダーソン(Margaret L. Anderson)の著作である。その内容については後に詳しく論じるが、J・レタラック(James Retallack)が「帝政期のドイツの政治文化に関する最も重要な研究」と評するアンダーソンの研究、そしてこれに前後する諸研究によって、帝国議会研究は議会史や選挙史のみならず、ドイツ政治史全般に再考を促す段階に達している⁴。本稿は、紙幅の都合から二回に分けて、帝政期の帝国議会選挙に関する近年の研究動向を整理し、それらの成果と問題を確認することで、今後の課題を論じる。もっとも、膨大な蓄積のあるこの分野の先行研究を網羅的に把握することはできないため、とくに重要な知見をもたらしてくれる研究に限定して議論せざるを得ない。したがって、特定の政党を対象とした研究や帝国創設以前およびヴァイマル期の選挙研究、プロイセンをはじめとする諸邦レベルの議会についての研究などは議論から除外した。なお、本稿全体の構成は以下のとおりである。

1. はじめに
 2. 政治・社会構造の理論モデルの変化
 3. 統計学的手法の導入
- 〈以上、本号〉

4. 新たな選挙史研究へ
 - (1)選挙違反研究
 - (2)政治イベントとしての帝国議会選挙
 - (3)議会政治の進展?
 - (4)選挙と地域社会
 - (5)議会・選挙史研究の国際比較
5. おわりに

〈以上、次号〉

2. 政治・社会構造の理論モデルの変化

近代ドイツ政治史の考察にあたって出発点となるのは、政治学の分野から示された様々な理論モデルである。本章ではそれらのうちの代表的なものを挙げ、実際の歴史的過程を検討するうえでのそれぞれのメリットとデメリットを確認する⁵。

普通選挙制の下で有権者がいかなる投票行動をとるのか、その背景にどのような社会的土壌が存在しているのか、投票の結果がどのような政治的帰結をもたらすのかといった諸問題を考えるに際しては、二つのアプローチを設定することができる。一つは、有権者を一切の強制から自由な主体と捉え、その自発的な選択の要因とパターンを明らかにしようとするものであり、もう一つは有権者を取り巻く様々な社会的環境に目を向け、それらの特質や個人々人への影響力を考えるというものである。

前者の立場を代表するものとしては、アメリカの政治学者A・ダウズ(Anthony Downs)の合理的選択理論がある⁶。ダウズは経済学的手法を政治学に導入しながら、選挙を候補者と有権者とのあいだの互いの利害の取り引きとして捉え、有権者の投票行動は期待効用差、すなわち自らが投票した政党が勝利した後に得られると見込まれる効用の期待値の差によって規定されるとした。しかし、ダウズの数理的な方法論は常に史的な制約に拘束される歴史研究にはなじみ難いだけでなく、議会をつつじた個々の議員の政治的権限の行使の余地が限定されており、クライアンテリズムが浸透する政治的土壌が弱く、また歳費がなく1906年までは日当の支給もなかった帝国議会の検討には用い難い⁷。

そのため、ドイツ政治を説明するうえで多くの歴史研究に受容されてきたのは後者のアプローチであり、その代表例が社会学者M・R・レプジウス(M. Rainer Lepsius)が1960年代に提唱した「ミリュー-Milieu」論である⁸。周知のとおり、レプジウスは近現代ドイツの政治勢力を、宗派や文化や地域の伝統、経済状況、社会的構成、アソシエーションや情報メディアによるネットワークといった諸条件から、カトリック(中央党を支持)、プロテスタント都市中間層(自由主義諸政党を支持)、プロテスタント都市労働者階級(社会民主党を支持)、プロテスタント農村住民(保守諸政党を支持)とい

う四つの「社会モラル・ミリュー-sociomoral milieus」に分類し、この構造がナチスの権力掌握に至るまでのドイツ政治の基調をなしているとした。レプジウスの理論は、既に帝政期のF・フェルドマン(Felix Feldmann)にほぼ同様のものを確認することができるし、中央と地方、政府と教会、第一次経済と第二次経済、労働者と雇用者という対抗軸によってヨーロッパの政治構造を説明するS・M・リップセット(Seymour M. Lipset)とS・G・ロッキン(Stein G. Rokkan)の政治理論とも親和性が強く、現在でも広く受け入れられている⁹。

しかし、近年の研究には、ミリュー論を意識しつつもそれに代わる新たな理解を提起しようとする傾向が強まっているように思われる。それと言うのも、その後の実証的な政治史研究の蓄積により、ミリュー論がはらむ問題点が浮き彫りになったためである。そうした問題点の幾つかを列挙すれば、レプジウスの説明では政党組織の成立以前に各ミリューが形成されていることとなり、各政党によるその時々の政治決定がミリューに与える影響が十分に捉えられない。また、レプジウス自身は自由主義ミリュー内部における左派と国民自由党の対立や、各ミリューの時間的な変質に注目する必要があることを訴えてはいるものの、安易に彼の理論を援用すれば、ミリュー間にまたがる政治行動が見失われがちである。さらに同理論には、どのミリューにも属さない有権者と投票棄権者の区別がなされていないことや、新たに投票に参加した集団による既存の政党組織に回収されえないような政治行動——具体的には、1860年代以降のプロテスタント都市労働者階級による社会主義ミリューの形成、そしてナチ体制によるミリュー構造の破壊——しか、ミリュー構造を揺さぶる大きな政治変化として把握できないという欠点もある。このような理由から、こんにちの研究の水準からすれば、帝国議会選挙をはじめとする様々な政治行動をミリュー論の構図にためらいなく押し込めて説明することは既にできないのである。

しかしながら、政党とその支持母体となる社会集団を様々な社会的指標に基づいて分類し、それらの競合や共存の関係からドイツ政治史を説明しようとするレプジウスの論は後続の研究を触発し、幾つかのバリエーションを生み出すこととなった。例えば、Th・ニッパーダイ(Thomas Nipperdey)などの歴史家は、ミリュー論における四つの政治集団のうち、自由主義を右派と左派に分割して五つの政治集団を設定しており、この説明はレプジウスのミリュー論に比して帝政期の政治状況により忠実だと言える¹⁰。しかし、ニッパーダイの議論の場合、自由主義両派の思想や政党組織は確かに違うが、それぞれの支持層に明確な社会的相違を見出すのは難しく、議会や政党のレベルに議論が限定されてしまう可能性があることは否定できない。また、

前工業的・身分制的グループと産業革命以降のグループを対置するO・ブッシュ (Otto Büsch) や、左派と右派というカテゴリーに諸政党を整理するM・ノイゲバウアー＝ヴェルク (Monika Neugebauer-Wölk) のように、帝政期の政治集団を二つに分類する論者もある。しかし、このあまりに単純な図式が多数の研究者たちからの支持を得ているとは言い難い¹¹。

むしろ、レプジウス後の理論としてこれら以上に重要なものは、政治学者K・ローエ (Karl Rohe) がルール地方に関する考察を元に、ミリュウ論を発展させるかたちで展開した「ラーガーLager」論である¹²。この理論は四つのミリュウからなる政治構造を前提としつつ、各ミリュウの上位概念として、社会主義陣営、カトリック陣営、そしてプロテスタント都市中間層＝自由主義ミリュウとプロテスタント農村＝保守ミリュウを一つにまとめた「ナショナル陣営」の三つのラーガー (陣営) を設定する。ラーガーはミリュウとは異なり、内部の均質性よりも他ラーガーとの相違によって把握され、レプジウスの論では社会的帰属の点からどのミリュウにも分類できなかった諸個人をも含んだ、緩やかな集団概念として規定されている。

ローエの編み出したこの理論には、レプジウスと比較した場合に以下のようなメリットがある。まず、ラーガー論では、政党組織の形成や変化がそれ以前から存在するミリュウにもたらす影響を説明できるようになる。例えば、ラーガー論の場合、1870年代の文化闘争によって中央党が結党されたことで、それまでは様々な政党に投票していたカトリック・ミリュウが中央党を支持するカトリック陣営にまとまっていったという説明となり、レプジウスのモデルよりも実際の歴史的過程を踏まえた柔軟な議論が可能となる。次に、ミリュウ論が各ミリュウ間の有権者の移動を把握するのに不向きなのに対し、ラーガー論はミリュウよりも流動性の高い集団区分によって、有権者の移動を容易に説明できる。

今一つ重要なのは、レプジウスが、ナチ体制の成立によってミリュウ構造が解体し、第二次世界大戦以降の旧西ドイツでは個々の有権者の利害関心に基盤を置いたより流動的な投票行動が支配的になったと考えるのに対して、ローエはナチの政権獲得をナショナル陣営のナチ党への宗旨替えの結果とし、戦後のCDU/CSUまでもを帝政期からのラーガー構造の伝統の延長線上で説明している点である。換言すれば、前者の立場ではドイツの政治構造の歴史的変化をナチ体制以前までしか論じることができないのに対して、後者は第二次世界大戦後のドイツ政治の展開を含めた長期的な討究に適合していると言える。

このようなラーガー論の長所は、1990年代以降の選挙史研究においてよく理解されており、次章で詳述するJ・スパーバー (Jonathan Sperber) などの研究者も

ローエのモデルにより高い評価を与えている。ただし、ラーガー論はやや複雑に過ぎる感もあり、不用意な借用では、優れた理論モデルが有する、複雑な歴史的過程を簡明に説明するという本来の利点が十分に示されないのではないかという危惧が残る。また、より具体的な次元では、保守党から自由主義左派への移行をスムーズに説明できるのに、SPDから自由主義左派への移行を捉えにくいといった問題もある。

ここまで、レプジウスのミリュウ論とローエのラーガー論を中心に、帝政期ドイツの選挙研究のバックボーンとなりうる政治理論の特徴を確認した。本章の最後に付言しておくべきは、これらの諸理論が、ナチズムへの連続と断絶を視野に入れつつドイツの民主政の構造的問題のルーツの一端を帝政期に見出そうとする視角を共有しており、その学説史的な経緯がいわゆる「ドイツの特殊な道」論と軌を一にしているという点である。このことは、ナチズムによるミリュウ構造の破壊を悲観的に論じたレプジウスの主張が、G・イリー (Geoff Eley) や D・ブラックボーン (David Blackbourn) をはじめとする「イギリス学派」による批判的検討を経て理論的に彫琢され、西ドイツ民主主義との連関を射程に収めたラーガー論が出現したという経緯によく示されている¹³。しかし、こうした見方に寄りかかりすぎて、レプジウス以降の展開を「特殊な道」論の傍流として片づけてしまうことは有益とは思われない。なんとすれば、民主主義的制度のなかでのナチズムの台頭という、ドイツ史の決定的瞬間への欠くべからざる問題関心から生じた、歴史的連続と断絶に対する問いかけを短絡的に特殊な道論に直結させて、これをドイツの特殊性、後進性を自明視する賞味期限切れの論として切り捨てれば、中・長期的な観点から、あるいは比較史的な立場からドイツの政治文化の特質を問う視点の有効性が失われてしまうからである。

また、レプジウスやローエらの成果を択一的に用いたり、いずれかに過度に依存することも慎まねばならない。多様で複雑な歴史的実態を理論的枠組みに回収してしまえば、議論の硬直化を免れないからである。個別の事象の抽象化によって構築された理論を出発点としつつも、個別事例の検証をつうじてその再構築に迫るところにこそ、実証的な歴史研究の意義がある。

3. 統計学的手法の導入

レプジウスやローエらの成果は帝国議会研究に大きな刺激を与えることとなったが、とりわけ目覚ましい展開がみられた研究スタイルの一つが、統計学的手法やコンピューター技術を駆使した数量的分析であった。その成果は、1980年代末から議会や政党、選挙に関連する事典やハンドブックの刊行が相次いだことに示されている¹⁴。それらの多くは、ドイツ連邦議会の支援を受けた「議会・政党史委員会 Die Kommission für

Geschichte des Parlamentarismus und der politischen Parteien」によるものであり、なかでもC-W・ライベル(Carl-Wilhelm Reibel)が作成したハンドブックは、ヴィルヘルム期に関して選挙区ごとの詳細な情報をまとめており、現在活用できる類書のうちで最も充実したものとなっている。ビスマルク期を対象とする続刊の出版が待たれる¹⁵。また、この類の文献は政党別でも出版されており、それぞれの詳細なデータを得ることができる¹⁶、プロイセンをはじめとする諸邦レベルでの選挙¹⁷、さらに1848/49年革命期や帝国議会に先行して男性普通選挙が実施された北ドイツ連邦についても¹⁸、多くのレファランズが出版されている。ただし、この手の研究書につきまとう問題として、細かなデータが文献ごとに異なっていたり、単純なミスが見受けられることもあり、掲載データを用いる際には複数の文献の対照が不可欠である。もう一つ紹介する価値があるのは、A・ビーファング(Andreas Biefang)の『ビスマルクの帝国議会』である¹⁹。同書は、写真家のH・J・ブラーツ(Hermann Julius Braatz 1844-1914)が1889年、1892年に出版した写真集を復刻し、史料としての議員や議会の写真などに関する詳細な解説を加えたものであり、帝国議会についての視覚的イメージを得る助けとなる。

こうした動向に並行し、統計学的手法を活用した優れた個別研究の刊行も続いた。以下に、それらのなかでもとりわけ高い価値を有するS・スーヴァル(Stanley Suval)、J・R・ヴィンクラー(Jürgen R. Winkler)、スパーバーの著作を中心に、1980年代後半から1990年代にかけての選挙史研究がいかなる新たな知見を獲得するところとなったのかを明らかにする。

近年のこのような流れに先鞭をつけたのは、アメリカの歴史学者スーヴァルである²⁰。ナチズムの出現に至るドイツ政治の展開を跡づけようとするねらいから、「ヴァイマル〔期の選挙システムが：引用者〕がいかに機能していなかったかではなく、ヴィルヘルム期のシステムがいかにうまく機能していたか」を問う彼の研究の重要な特徴は²¹、帝政期の政治史研究に、いち早く「生態学的推論ecological inference」と呼ばれる統計学的手法を導入したことである²²。秘密投票制であった帝国議会選挙について、匿名の投票者たちがいかなる宗派や社会階層に属していたのか、そして彼らの投票行動が毎回の選挙に際してどのように変遷していったのかを考えるのはきわめて難しい。そのため、古典的な研究においては、特定のミリューに属するとされる集団の大部分が、毎回の選挙で自分の属するミリューを代弁する政党に投票し続けるであろうという想定を前提にせざるをえなかった。この問題を克服するためにスーヴァルが用いた生態学的推論のエッセンスを大雑把に説明すれば、これは、特定の選挙区や地域の行政区分ごとの宗派や職業別の住民構成などを統計

調査から確認することで、対象地区を「カトリック地区」、「労働者地区」、あるいは「カトリック労働者地区」などとカテゴライズしたうえで、その地区の投票結果を照合し、「カトリック労働者地域であるA地区は〇〇年の選挙においてB党に得票し、その次の△△年の選挙ではC党に投票した」といったデータを取り、全国規模で集計し、これによって「カトリック労働者のd%が〇〇年にB党を支持していた」、「〇〇年のB党の支持者のe%がカトリック労働者であった」、あるいは「カトリック労働者のf%が〇〇～△△年にかけてB党からC党に移行した」といった推測を行う手法である。さらにスーヴァルは、各政党への支持と、投票率や支持者の社会層、宗派、その政党の候補者が当選した選挙区の都市化の度合いの連関を回帰分析によって数値化し、その時間的推移を明らかにし、政党間の比較を試みている。こうした手法をつうじて得られる見解にはあくまで推論が含まれているとはいえ、スーヴァルの研究によって従来よりもはるかに詳細な論究が可能になったことは正當に評価されるべきである。

スーヴァルが最初に主張するのは、帝政期の政府・官吏による選挙運営が効率的で公正であったこと、同時期の西洋諸国と比較しても投票率が高く、青少年や女性といった非有権者をも含め、国民が積極的に政治参加していたこと、そして選挙にまつわる不正行為が多くなかったこと、すなわち、権威主義的帝政において普通選挙制が十分に機能していたことである。彼の見解では、帝政期の政治は次第に地域主義を脱却し、選挙はナショナルと呼ぶにふさわしい政治イベントとなっていた²³。

このような前提のうえに、スーヴァルは次に、積極的な政治行動をみせたマイノリティの社会集団として、カトリック・ミリュー、社会主義ミリュー、保守ミリュー、そしてユダヤ人、ポーランド人の選挙行動を考察する。彼は統計学的分析をつうじて、これらの諸政治集団がそれぞれ強固な一体性を保持しており、各政党への支持基盤として相当に政治化されていたとし、自分の属するミリューを代表する政党に熱心な支持を与え続けたこれらの政治集団を「確固たる投票者たち affirming voters」と呼び、有権者全体の約三分の二が彼らによって占められていたとする。反面で、帝政期に新たな政治文化を担うこととなったこうした投票者とは異なり、従来の政治文化の担い手である、主に自由主義を支持してきたプロテスタント中間層は多様性が強く、流動的、大衆政治化が進行するなかで弱体化していった。世紀転換期頃からは彼らは自由主義的理念に代えてナショナリズムをよりどころに政治的に再結集し、そこから艦隊協会や全ドイツ連盟、オストマルク協会といった国粋的組織や、あるいは全ドイツ手工業者同盟、帝国ドイツ中間層連合、そして「創造的諸身分のカルテルKartell der Schaffende Stände」な

どの諸組織が登場してくるというのがスーヴァルの見方である。

スーヴァルの研究のもう一つの特徴は、全国レベルでの統計学的分析によって得られた上述のような情報で事足りりとするのではなく、397の帝国議会選挙区のなかから、保守勢力の金城湯池とも言うべき西プロイセンのエルビング＝マリエンブルク(1903～12年)、国民自由党とポーランド党が拮抗していた西プロイセンのグランデンツ＝シュトラスブルク(1912年)、そして国民自由党、中央党、社会民主党が争っていたドルトムント＝ヘルデ(1898～1912年)という三つの地区を取り上げ、そこでの選挙の実態を詳論していることである。この作業は、彼の議論をより多面的で説得力のあるものにしている。

さらにスーヴァルは、都市化を背景とした人口移動に伴う選挙区ごとの一票の重みの変化や諸邦議会への普通選挙権の拡大、そして帝国議会の政治的権限の増大といった、帝政末期の選挙制度改革をめぐる動向を論じ、帝国議会によって培われた政治文化がヴァイマル期にどのように結びついていくのかを展望して、考察を終える。

以上のような内容をもつスーヴァルの著書は、「帝国の敵」への迫害をつうじた負の統合や、非民主的で権威主義的な上からの操作よりも、国民の自発的で主体的な政治参加にこそ帝政ドイツの政治文化の基調を見出そうとするものであり、特殊な道論に対する英米の研究者の見直し論とも呼応し、帝政期の選挙史研究を新たな水準へと押し上げたと言えよう。しかし他方でスーヴァルは、ドイツ政治の歴史的特殊性を否定するあまり、帝国議会選挙がドイツの民主化に果たした役割を過大視している感がある。この点については、G・A・リッター(Gerhard A. Ritter)やJ・J・シーハン(James J. Sheehan)が、とくに1903年に投票所に記名用の個室が導入されるまで、とりわけ農村部では秘密選挙の原則が破られるという事態がたびたび確認されること、あるいはカトリック聖職者や地域エリートによる有権者に対する強制行為があったことなどを明らかにしているし²⁴、こうした選挙違反行為こそがアンダーソンの優れた論考の中心対象となっている。したがって、積極的な投票行動が政治過程の改善を掲げる要求を生み出し、帝国政治に占める選挙の比重を増大させたとするスーヴァルの捉え方はやや強引に思える²⁵。また、彼の統計学的分析の正確さやデータ操作の妥当性にはスパーバーの厳しい批判がある²⁶。とは言え、スーヴァルの著作を皮切りに、数年後にはJ・W・ファルター(Jürgen W. Falter)を中心としたグループによるヴァイマル期の選挙研究が登場し、多くのドイツ人研究者も含め、数量的な選挙研究が活性化していたことは過小評価されるべきではない²⁷。

次に、ファルター門下のヴィンクラーが1995年に刊

行した、帝政期からヴァイマル期にかけての時期を対象とした著作を取り上げる²⁸。ヴィンクラーは、自由主義勢力の形成をもって始まったドイツの政党構造がどの程度まで強固で、その伝統がどれほど維持されたのか、近代の急激な社会変化からいかなる影響を被ったのか、そして政党構造の変化がナチズムの台頭とどのように関係するのかといった諸問題を扱う。その際に彼はレプジウスの理論をベースにしており、四つのミリューと地域的な小政党(バイエルン農民同盟、ドイツ中間層全国党、ハノーファー党、ポーランド党、エルザス・ロートリンゲン党、デンマーク党など)、そして国民社会主義の歴史的な特徴を確認するところから議論を開始する。ここで看過できないのは、ヴィンクラーが投票棄権者の存在を考慮した論究を行っている点である。例えば各政党の得票数の推移を論じるにあたって、彼は有効投票中の獲得票の割合と、棄権者を含めた有権者全体のなかでの獲得票の割合を明確に区別しており、その結果、有効投票中の得票率の推移から得られる1870年代の自由主義の凋落のイメージが全有権者中の得票率ではかなり緩和されたり、前者のデータでは1881年選挙に確認される1880年代の自由主義の短期的復調のピークが後者のデータでは1887年になるなど、従来の理解とは大きく異なる帝政期の政治構図が示されることとなる²⁹。

そしてヴィンクラーは、自由主義勢力を対象とした考究に進む。ここでは、各政党の関係や棄権者も含めた有権者の支持政党の移動が、選挙区ごとの得票結果から算出した相関係数などに基づいて検証されたうえで、自由主義に対する支持の高低という観点から把握される地域ごとの政治的伝統、宗派、都市・農村関係といった諸要素が自由主義ミリューをどの程度まで規定していたのか、そして人口増や都市化、産業構造の変化等の現象がミリューの変質にいかなる影響を及ぼしたのかが詳論されている。ヴィンクラーの主張では、自由主義勢力は地域性に強く拘束されており、そのことはとりわけヴァイマル期よりも帝政期に当てはまる。具体的に言えば、地域レベルでみた場合の自由主義の帝国議会選挙での得票の増減は全国レベルでの得票数の趨勢とは一致せず、自由主義勢力が安定した基盤を獲得しうるかどうかは、プロテスタンティズム、民主的傾向と大ドイツ主義的傾向という、1848/49年革命に遡る地域ごとの自由主義的志向の伝統、そして同じ地域に自由主義と保守主義が併存しているか否かという地理的条件に左右されていたことになる³⁰。ただし、1870年代以降、こうした地域の伝統は次第に後退していく。反面で、都市と農村の相違や階級構造の変化と自由主義への支持の関係は明確ではなく、社会主義勢力などとは異なり、自由主義が都市化や産業化から被った変化はさほど大きくはない。

さらにヴィンクラーは、既に帝政初期から相当数の

有権者の政党間の移動があったことを指摘する。彼に依れば、帝政期の有権者の選挙行動の流動性はヴァイマル期や第二次世界大戦後を上回っており、ミリュウ構造が安定化するのには帝政末期からだという。この安定性はヴァイマル期に受け継がれるが³¹、しかし東部地域に基盤を確保しえた国家人民党を別とすれば、ヴァイマル期の諸政党は帝政初期の自由主義政党のように地域的な安定性を享受しえなくなる³²。したがって、1871～1933年という中・長期的スパンでドイツの政治構造を考えた時、ミリュウ論をはじめとする政治理論が喚起する静態的イメージは通用せず、地域的伝統や宗派、社会階層等といった指標の時代的な変化が及ぼすミリュウの流動性こそがより詳細に検討されるべきことになる。

ヴィンクラーの考察はナチズムの台頭の時期に至る。彼は、ナチ党が自由主義ミリュウを侵食し、そこから議席を奪うかたちで台頭したという、換言すれば自由主義の弱さがナチズムの勃興の原因の一つとなったとする旧説に疑問を呈する。その理由は、自由主義の牙城であった地域の相当部分においてナチ党の支持率は全国平均を下回っていたし、社会階層がナチ党の進出の重要な鍵となったのに対して、自由主義勢力の浮沈の要因はそれとは無関係だったからである。また、政治理念や政治方針の考察に立ち戻った時、両勢力の親和性を示すものは乏しい——統計的分析から得られる相関関係は歴史事象の因果関係とは必ずしも一致しない。彼の分析では、そもそも自由主義ミリュウは帝政期から安定性、一体性が弱かったわけで、ナチズムの進出に際して自由主義の一体性が解体したといった構図は描けないのである³³。

以上のように、ミリュウ論に立脚しつつもミリュウの脆弱さや流動性を明らかにしたヴィンクラーの見解はスーヴァルのそれとは大きく異なるものであり、帝政期のダイナミックな歴史的展開と複雑で多様な政治状況をよりの確につかんでいるように思われる。ただし、ヴィンクラーの主たる考察対象は自由主義であるし、帝政期についての言及の大部分は1870年代にとどまっている。また、具体的な地域や歴史的事件に関する言及が少ないことも指摘できる。

ヴィンクラーの成果を認めつつもその問題点をふまえ、さらに包括的で精度の高い考察を行っているのが、スパーバーが1997年に発表した研究である³⁴。スパーバーは、1897年と1907年の住民統計を利用してプロイセンの各県や諸邦を77(1897年)ないし78(1907年。1905年に東プロイセンにアレンシュタイン県が新設されたため)の地区に区分し、ミリュウ論やラーガー論を踏まえて、保守、国民自由党、自由主義左派、中央党を含むマイノリティ政党、社会民主党、無党派層の六つの集団の生態学的推論を行う。

同書は三部構成であり第三部は相当の紙幅を割いて

統計的手法についての技術的な説明に充てられている。以下に、本論にあたる第一部、第二部を確認する。

第一部では、諸政党の考察が行われる。スパーバーは先述の六集団を、社会民主党、マイノリティ政党(中央党、アルザス・ロレーヌ党、ポーランド党、デンマーク党、ヴェルフ党など)、ナショナル陣営(自由主義諸政党、保守諸政党)の三つの分類し、それぞれに考究を加える。まず社会民主党については³⁵、同党は無党派層の獲得のみで党勢を拡大したわけではないこと、また都市の労働者層が圧倒的部分を占める党ではないことが確認される。スパーバーに依れば、社会民主党は確かに1887年選挙までは無党派層の獲得によって成長を遂げたが、ヴィルヘルム期には有権者の世代交代や人口移動に応じて支持層が多様化し、無党派層へさらに浸透するだけではなく、様々な他政党の支持者を奪取することで勢力を増していった。同党は従来から知られているように農業地域では得票率が低く、また宗派的にはプロテスタント地域が優勢であるが、しかし通説とは異なり、階級は同党の浮沈に大きな意味をもっておらず、とくに1900年以降は中間層が労働者階級と同程度のSPD投票者中のウェイトを占めている。普段から社会民主党系の協会組織や労働組合に加盟し、また同党の上昇に労働環境や生活状態の向上を仮託してきた労働者層とは異なり、社会民主党への投票がなんらかの社会的不利益をもたらす危険すらあった中間層の支持を重視するスパーバーの見方は、スーヴァルが社会民主党支持者を労働者層とし、彼らの内的な一体性、均質性と、他集団との懸隔を強調するのは対照的である³⁶。

マイノリティ政党についても、帝政期の前半と後半での変質が確認される³⁷。すなわち、このカテゴリーに属する諸政党は、ビスマルク期には政府との対抗をつうじて堅固な政治集団を形成したが、文化闘争が終了し、さらにはヴィルヘルム期が到来すると公権力との対抗関係が希薄になり、次第に支持者が減少していった。しかしそのなかで、有能な指導者の下で組織の再建に成功した中央党やポーランド党は党勢を回復、あるいは拡大しえた。ただしスパーバーはここで、20世紀に入ってから増加した中央党支持者が1880年代までの支持者と重なるのか、それとも別の集団なのかは明らかにしていない。

ナショナル陣営については、自由主義勢力と保守勢力が選挙戦において友好な関係を結びえたのは1870年代や1907年の各選挙の時に過ぎず、基本的に両派は投票者をめぐって競合し合っており、したがってナショナル陣営を一つの政治集団として捉えることは難しいという見解が示される³⁸。これはヴィンクラーの主張とも共鳴しているが³⁹、スパーバーはさらに進んで、ナショナル陣営の内部の境界線は単純に自由主義と保守主義の間に見出しうるものではなく、1880年代に自由

主義左派が国民自由党と保守諸政党のカルテルに対抗したように、時期によって複雑な変遷を示したことを明らかにしている。また、国民自由党にはカトリックからの投票も相当数あったことや、プロテスタントの都市労働者や農民の一定部分も自由主義と保守の双方に票を投じたこと、有産階級のプロテスタントのなかにも他の政党へ投票する人びとが一定数存在していたことを指摘し、ナショナル陣営が有産プロテスタント層から構成されていたとする理解にも一石を投じている。1890年代以降は、ナショナル陣営もマイノリティ陣営と同様に再組織化を余儀なくされ、そうした状況のなか、自由主義勢力は勢力を喪失していく。

同書の第二部は、帝政期の13回の選挙のそれぞれの特徴を分析している。ここでの説明に依ると、ビスマルク期は投票率が50%から75%にまで上昇していった反面で、連続して帝国議会投票を棄権した人びとや、投票所に行くかどうかや投票先を選挙ごとに変更した人びとが常に有権者の半数を占める「投票棄権者の時代」であり、マイノリティ諸政党(1874年)、保守党(1878年)、自由主義左派(1881年)、カルテル諸政党(1887年)、そして社会民主党(1890年)の例に顕著なように、流動的な票が突如として特定の政党の躍進をもたらすという事態が繰り返し起こった。これに対して、ヴィルヘルム期は「政党の時代」と表現され、政治キャンペーンの拡大や政党や協会の組織化の進行を背景に各政党の支持者が固定化されていったとされる⁴⁰。しかし、この時期に有権者は特定の政党に対する忠誠を高めていったのと同時に、その熱心な忠誠を選挙の度に別の政党に切り替えていくという傾向もあった。

ここから明らかなように、スパーバーはビスマルクの辞職によってドイツ帝国史の転換点とされる1890年は選挙史の次元でも重要な画期であったとしているが、こうした見解にはさらなる議論の余地があろう。一例を挙げれば、Th・キューネ(Thomas Kühne)は1898年と1903年の選挙の相違を重視し、この間にこそ、ビスマルク時代からドイツ政治の構図を決定する重要な指標であった「帝国の友」と「帝国の敵」という区別が消滅し、経済的な「生産者」と「消費者」の対比が重要となり、特定の政党を選択し他政党を切り捨てる「あれかこれかEntweder/Oder」の政治から、複数の政党の提携を基調とする「あれもこれもund」の政治という決定的変化があったとしている⁴¹。この意見の相違は、「世紀転換期」なる表現で曖昧に一括りに語られることの多いドイツ政治史の転換点をより正確に画定しようとするうえで示唆に富むものであり、今後の研究が追究すべき論点の一つとなろう。

最後にスパーバーは、帝国議会選挙をより長期的な時間枠のなかに位置づけて再考しており、ヴァイマル期以降の選挙史や諸外国との比較にも論が及んでいるが、本稿の問題関心からしてとくに重要なのは、彼が、

自らが選挙史研究を開始するにあたって強い影響を受けた「ミリュエ論に別れを告げる必要があると考える」と表明している点である⁴²。スーヴァルやヴィンクラーを経てスパーバーへと続く一連の帝国議会研究は統計学的な精緻の度合いを高め、ますます多面的で説得力ある分析結果を提供してくれることとなったが、実証的な歴史研究はスパーバーに至り、ミリュエ論をはじめとする従来の政治理論の静態的なモデルの限界を強く認識することとなったのである。こうした研究史上の展開はドイツ内外の研究者に大きな刺激を与え、この後の議会史研究、選挙史研究は統計的分析にとどまらない拡大を示している。もっとも、日本のドイツ帝国史研究ではなおミリュエ論を土台とした議論が一般的であり、今後の本格的な討究が必要である。

(次号に続く)

[本章は、平成二五-二八年度科学研究費補助金・若手研究(B)「帝政期ドイツの帝国議会における選挙違反行為の実態分析とミリュエ論の再検討」(課題番号20386577)の成果の一部である。]

註

- 1 この表現は、註2のアンダーソンの著書のドイツ語版のタイトルである。
- 2 Margaret L. Anderson, *Practicing Democracy: Elections and Political Culture in Imperial Germany*, Princeton 2000, p.9.
- 3 Ibid., p.9.
- 4 Ibid.; James Retallack (ed.), *Imperial Germany 1871-1918*, New York 2008, p. 292. アンダーソンの研究に対する詳細な論評は、vgl. Gerhard A. Ritter, Die Reichstagswahlen und die Wurzeln der deutschen Demokratie im Kaiserreich, in: *Historische Zeitschrift*, 275-2, 2002.
- 5 Vgl. Thomas Kühne, Wahlrecht - Wahlverhalten - Wahlkultur: Tradition und Innovation in der historischen Wahlforschung, in: *Archiv für Sozialgeschichte*, 33, 1993.
- 6 Anthony Downs, *An Economic Theory of Democracy*, New York 1957 (古田精司監訳『民主主義の経済理論』成文堂、1980年)。
- 7 Elfi Pracht, *Parlamentarismus und deutsche Sozialdemokratie 1867-1914*, Pfaffenweiler 1990, S. 304-309.
- 8 M. Rainer Lepsius, Parteiensystem und Sozialstruktur: zum Problem der Demokratisierung der deutschen Gesellschaft, in: W. Abel u. a. (Hg.), *Wirtschaft, Geschichte, Wirtschaftsgeschichte, Festschrift für Friedrich Lütge*, Stuttgart 1966, S. 371-393. (auch in: Gerhard A. Ritter (Hg.), *Deutsche Parteien vor 1918*, Köln 1973, S. 56-80); M. R. Lepsius, *Demokratie und Deutschland: soziologisch-historische Konstellationsanalysen*, Göttingen 1993, S. 25-50. ミリュエ論に関してはさらに、vgl. Heinrich Best (Hg.), *Politik und Milieu: Wahl- und Elitenforschung im historischen und interkulturellen Vergleich*, St. Katharinen 1989.

- 9 Felix Feldmann, *Wesen und Werden der politischen Parteien in Deutschland*, Leipzig 1913; Seymour Martin Lipset/Stein Rokkan (ed.), *Party Systems and Voter Alignments: Cross-national Perspectives*, New York 1967.
- 10 Thomas Nipperdey, Grundprobleme der deutschen Parteigeschichte im 19. Jahrhundert, in: Gerhard A. Ritter (Hg.), *a. a. O.*, S. 32-55.
- 11 Otto Büsch, Parteien und Wahlen in Deutschland bis zum Ersten Weltkrieg: Gedanken und Thesen zu einem Leitthema für Forschung und Unterricht über die Geschichte der „Industrialisierung“ im 19. und frühen 20. Jahrhundert, in: Walter Heistermann (Hg.), *Abhandlungen aus der Pädagogischen Hochschule Berlin*, Bd. 1, Berlin 1975; Monika Neugebauer-Wölk, *Wählergenerationen in Preußen zwischen Kaiserreich und Republik: Versuch zu einem Kontinuitätsproblem des protestantischen Preußen in seinen Kernprovinzen 1871-1933*, Berlin 1987.
- 12 Karl Rohe, *Wahlen und Wählertraditionen in Deutschland: kulturelle Grundlagen deutscher Parteien und Parteiensysteme im 19. und 20. Jahrhundert*, Frankfurt a. M. 1992.
- 13 とくに重要なものとして、Goeff Eley, *Reshaping the German Right: Radical Nationalism and Political Change after Bismarck*, New Haven/London 1980; David Blackbourn, *Class, Religion and Local Politics in Wilhelmine Germany: The Center Party in Württemberg before 1914*, New Haven/London 1980.
- 14 帝国議会に関する統計的分析の基礎史料となるのは、*Stenographische Berichte über die Verhandlungen des Deutschen Reichstages*, Berlin; Georg Hirth (Hg.), *Deutscher Parlaments-Almanach: Statistik des Deutschen Reichs; Monathefte zur Statistik des Deutschen Reichs; Vierteljahreshefte zur Statistik des Deutschen Reichs*. 古典的研究としては、vgl. Louis Rosenbaum, *Beruf und Herkunft der Abgeordneten zu den Deutschen und Preußischen Parlamenten 1847 bis 1919: ein Beitrag zur Geschichte des deutschen Parlaments*, Frankfurt a.M. 1923; Willy Kremer, *Der soziale Aufbau der Parteien des deutschen Reichstages von 1871-1918*, Emsdetten 1934; Fritz Specht (Hg.), *Die Reichstags-Wahlen von 1867-97: eine Statistik der Reichstagswahlen nebst Programmen der Parteien und dem Verzeichniß der gewählten Kandidaten*, Berlin 1898; Wilhelm Mommsen (Hg.), *Deutsche Parteiprogramme*, München 1964; Max Schwarz (Hg.), *MdR: Biographisches Handbuch der Reichstage*, Hannover 1965. これらのそれぞれの長所と短所については、大内宏一『ビスマルク時代のドイツ自由主義』彩流社、2014年、第三章「1870年代のドイツ帝国議会国民自由党議員団」の註(16)を参照。また、簡便なものとして、Bernhard Vogel/Dieter Nohlen/Rainer-Olaf Schultze, *Wahlen in Deutschland: Theorie, Geschichte, Dokumente 1848-1970*, Berlin/New York 1971; Gerhard A. Ritter (Hg.), *Wahlgeschichtliches Arbeitsbuch: Materialien zur Statistik des Kaiserreichs 1871-1918*, München 1980.
- 15 Carl-Wilhelm Reibel, *Handbuch der Reichstagswahlen 1890-1918: Bündnisse, Ergebnisse, Kandidaten*, 2 Bde., Düsseldorf 2007.
- 16 Wilhelm Heinz Schröder, *Sozialdemokratische Reichstagsabgeordnete und Reichstagskandidaten 1898-1918: biographisch-statistisches Handbuch*, Düsseldorf 1986; Wilhelm Heinz Schröder, *Sozialdemokratische Parlamentarier in den deutschen Reichs- und Landtagen 1867-1933: Biographien-Chronik-Wahldokumentation. Ein Handbuch*, Düsseldorf 1995; Bernd Haunfelder, *Reichstagsabgeordnete der Deutschen Zentrumsparlei 1871-1933: biographisches Handbuch und historische Photographien*, Düsseldorf 1999; der., *Die Liberalen Abgeordneten des deutschen Reichstags 1871-1918: ein biographisches Handbuch*, Münster 2004; der., *Die konservativen Abgeordneten des deutschen Reichstags 1871-1918: ein Biographisches Handbuch*, Münster 2010.
- 17 とくに重要なものとして、Günther Grünthal, *Parlamentarismus in Preußen 1848/49-1857/58: Preußischer Konstitutionalismus - Parlament und Regierung in der Reaktionsära*, Düsseldorf 1982; Herbert Obenaus, *Anfänge des Parlamentarismus in Preußen bis 1848*, Düsseldorf 1984; Horst Conrad/Bernd Haunfelder, *Preußische Parlamentarier: ein Photoalbum 1859-1867*, Düsseldorf 1986; Hartwig Brandt, *Parlamentarismus in Württemberg 1819-1870: Anatomie eines deutschen Landtags*, Düsseldorf 1987; Bernhard Mann, *Biographisches Handbuch für das Preußische Abgeordnetenhaus 1867-1918*, Düsseldorf 1988; Bernd Haunfelder, *Biographisches Handbuch für das Preußische Abgeordnetenhaus, 1849-1867*, Düsseldorf 1994; Bernd Haunfelder/Klaus Erich Pollmann, *Reichstag des Norddeutschen Bundes 1867-1870: historische Photographien und biographisches Handbuch*, Düsseldorf 1989; Thomas Kühne, *Handbuch der Wahlen zum Preußischen Abgeordnetenhaus, 1867-1918: Wahlergebnisse, Wahlbündnisse und Wahlkandidaten*, Düsseldorf 1994; Hans-Peter Becht, *Badische Parlamentarier 1867-1874. Historische Photographien und biographisches Handbuch*, Düsseldorf 1995; Gerhard A. Ritter (Hg.), *Wahlen und Wahlkämpfe in Deutschland: von den Anfängen im 19. Jahrhundert bis zur Bundesrepublik*, Düsseldorf 1997; Herbert Lepper, *Volk, Kirche und Vaterland. Wahlaufufe, Aufufe, Satzungen und Statuten des Zentrums 1870-1933: eine Quellensammlung zur Geschichte insbesondere der Rheinischen und Westfälischen Zentrumsparlei*, Düsseldorf 1998; Elvira Döschner/Wolfgang Schröder, *Sächsische Parlamentarier 1869-1918: die Abgeordneten der II. Kammer des Königreichs Sachsen im Spiegel historischer Photographien. Ein biographisches Handbuch*, Düsseldorf 2001.
- 18 Rainer Koch (Hg.), *Die Frankfurter Nationalversammlung 1848/49: ein Handlexikon der Abgeordneten der deutschen verfassungsgebenden Reichs-Versammlung*, Kelkheim 1989; Heinrich Best/Wilhelm Weege, *Biographisches Handbuch der Abgeordneten der Frankfurter Nationalversammlung 1848/49*, Düsseldorf 1996; Klaus Erich Pollmann, *Parlamentarismus im Norddeutschen Bund 1867-1870*, Düsseldorf 1985; Bernd Haunfelder/Klaus Erich Pollmann, ebd.
- 19 Andreas Biefang, *Bismarcks Reichstag: das Parlament in der Leipziger Straße*, Düsseldorf 2002.

- 20 Stanley Suval, *Electoral Politics in Wilhelmine Germany*, Chapel Hill 1985.
- 21 Ibid., p. 9.
- 22 同理論については、さしあたりL・I・ラングバイン/A・J・リヒトマン、長谷川政美訳『生態学的推論』朝倉書店、1980年、参照。
- 23 Suval, op. cit., pp. 21-54, 161-179.
- 24 Gerhard A. Ritter, *Die deutschen Parteien 1830-1914: Parteien und Gesellschaft im konstitutionellen Regierungssystem*, Göttingen 1985, S. 42; James J. Sheehan, *German Liberalism in the Nineteenth Century*, Chicago 1978, p. 169.
- 25 Suval, op. cit., p. 244.
- 26 統計学的な観点からの批判として、cf., Jonathan Sperber, *The Kaiser's Voters: Electors and Elections in Imperial Germany*, Cambridge 1997, pp. 7-16.
- 27 Jürgen W. Falter, *Hitlers Wähler*, München 1990. ファルターらによる、ヴァイマル期に関する簡便な書として、Jürgen Falter/Thomas Lindenberger/Siegfried Schumann, *Wahlen und Abstimmungen in der Weimarer Republik: Materialien zum Wahlverhalten, 1919-1933*, München 1986. スーヴァルの後に登場したドイツ人研究者による成果としては、Jürgen Schmādeke, *Wählerbewegung im Wilhelminischen Deutschland*, 2 Bde., Berlin 1995. しかし、同書は大部ではあるが新たな見解はさして示されておらず、またスパーバーはその統計学的分析の問題点を厳しく批判している。Cf., Sperber, op. cit., p. 16.
- 28 Jürgen R. Winkler, *Sozialstruktur, politische Traditionen und Liberalismus: eine empirische Längsschnittstudie zur Wahlentwicklung in Deutschland 1871-1933*, Berlin 1995.
- 29 Ebd., S. 85f.
- 30 Ebd., S. 189-193, 433.
- 31 Ebd., S. 281.
- 32 Ebd., S. 434.
- 33 Ebd., S. 438.
- 34 Sperber. op. cit. 2005年にペーパーバック版が出版されている。
- 35 Ibid., pp. 71-74.
- 36 Ibid., p. 72; Suval, op. cit., p. 95.
- 37 Sperber. ibid., pp. 104-107.
- 38 Ibid., pp. 151-153.
- 39 Winkler, a. a. O., S. 115.
- 40 Sperber, op. cit., pp. 266-267.
- 41 Thomas Kühne, Die Jahrhundertwende, die „lange“ Bismarckzeit und die Demolratisierung der politischen Kultur, in; Lothar Gall (Hg.), *Otto von Bismarck und Wilhelm II.: Repräsentanten eines Epochenwechsels?*, Paderborn 2002, S. 90f.
- 42 Sperber, op. cit., p. 284.